

謝 辞

この研究は孫野長治教授ご指導の下に行われたものである。実験に際して御協力、ご助言下された樋口敬二助教授、実験にご協力下された織笠桂太郎助手、大学院学生の高橋劭、菊地勝弘、石崎健二、学生の榎国夫、中島尚、里見穂、三浦秀一の諸氏、並びに気象データの提供、ヘリコプター及び飛行場使用の便宜をはかられた陸上自衛隊北部方面航空隊に厚く感謝の意を表わす。

参 考 文 献

1) 丸山晴久, 浜晃一, 1954: 雨滴や雪片の連続観測,

日本気象学会機関紙, 天気, 1, 50~52.

2) 棚沢泰, 抜山四郎, 1939: 液体微粒化の実験 (第3報), 日本機械学会論文集, 5, 18, 63~67.
 3) O.F.T. Roberts, 1923: The Theoretical Scattering of Smoke in a Turbulent Atmosphere, Proc. Roy. Soc., London, A104, 640~654.
 4) L.F. Richardson, 1926: Atmospheric Diffusion shown on a Distance-Neighbour Graph, Proc. Roy. Soc., London, A110, 709~737.
 5) G.D. Kinzer and R. Gunn, 1955: The Evaporation, Temperature and Thermal Relaxation-time of Freely falling Waterdrops, Jour. Met., 8, 71~83.

気象の文献に使われる国語

(Met. Mag. Vol. 91, No. 1082, 1962 から)

国連での公用語は英, フランス, ロシア, スペイン, 中国の5カ国語で, これら公用語については同時通訳が行なわれるということであるが, 世界の気象人の中での知識の交流が, どのような国語を使って行なわれているかを知ることは, 気象学を世界的な視野に立って見る場合, あるいは日本語の立場を客観的に認識するためにも必要ではなからうか。

G. A. Ball が, 1960年10月から1961年3月までの6カ月間に, イギリス気象局図書館の受け入れた図書および論文(観測結果やその概要だけをのせた年報のようなものは除く)に用いられている国語についてしらべたのが, 第1表である。

これによれば, 英語が最も重要な国語であり, 第2位はロシア語で, ドイツ語, フランス語, 日本語はこれにつぐが, ロシア語には遥かに及ばない。

この調べより以前に, 1950年から1954年までの“Meteorological abstracts and bibliography”にのった24,500の抄録について M. Rigby が調べたものがある(第2表)。

第1表と第2表を比べると, ロシア語の比率の増加が目だが, これはソ連の出版物の増加によるよりも, 近

第1表 国際十進分類法による 551・511 として分類される図書および論文について

国語の種類	図書および論文の数		ページ数	
	数	比率	ページ数	比率
英 語	96	55%	2221	70%
ロ シ ア 語	38	22	561	18
ド イ ツ 語	10	6	121	4
フ ラ ン ス 語	6	4	87	3
日 本 語	8	5	53	2
イ タ リ ア 語	2	1	26	< 1
ブルガリア語	3	2	20	< 1
ハンガリア語	3	2	19	< 1
ス ペ イ ン 語	2	1	19	< 1
中 国 語	3	2	18	< 1
ポ ー ラ ン ド 語	1	< 1	9	< 1
チ エ ッ コ 語	1	< 1	6	< 1
南アフリカ 公用オランダ語	1	< 1	3	< 1

年西方諸国でロシア語の気象に関する文献の入手が容易になったためであろうと G. A. Ball はいっている。

(藤本成男)

第 2 表

国語の種類	英 語	ドイ ツ 語	フ ラ ン ス 語	ロ シ ア 語	ス ペ イ ン 語	イ タ リ ア 語	日 本 語	オ ラ ン ダ 語
比 率	58%	21	7	5	2	2	2	1